

## エコノミスト 貧困対策の誤解と闘う

矢尾板俊平

### Fairfax でお見かけした William Easterly

私が、William Easterly をお見かけしたのは、ちょうど 2 年前の今頃であった。George Mason University の Center For Study of Public Choice で、若手の Public Choice の研究者が世界から（といっても、大体が米国内であったが）集まって、Public Choice の主要なトピックスについて、講師がレクチャーをし、そのレクチャーを基に議論をするというプログラムの中で、James M. Buchanan の次の講師が、Easterly であった。彼は、その日に、ニューヨークから駆けつけたようで、小さなアタッシュケースひとつで、Fairfax までやってきていたのであった。

Easterly は、MIT で経済学博士を取得後、世界銀行に入学。エコノミスト、調査局のアドバイザーとして、世界の貧困問題と、文字どおり、「闘ってきた」のであった。専門は、「経済成長分析」である。

### 経済発展にインセンティブが不可欠

この著書は、こうした Easterly のバックグラウンドが、かなり色濃く出ている。彼の最初のメッセージは、それが彼のメッセージの全てである。それは、「貧困を脱して豊かになるためには、人間はそうすることが経済的に見合うことをする」ということである。つまり、「先進国の援助供与国が、途上国の政府が、途上国の普通の市民が、三位一体となってこのインセンティブに反応するという人間の本性を活かすことができれば、経済発展は必然的に起こる」と述べている。

しかし、現実的には、「援助供与国、途上国の政府と市民は、しばしば経済学の基本原理を間違っ適用し、正しいインセンティブを活用せず、その結果、発展は起こらなかった」と述べているし、Easterly 自身も、インセンティブの活用は易しいことではないと認めている。「インセンティブの活用は、容易な万能薬ではない。援助供与国、途上国の政府と市民の相互に連動するインセンティブは複雑に絡み合い、それを解きほぐすことはやさしくはない」と認めているのである。

もうひとつの貧困への処方箋に対する、Easterly のメッセージは、「経済成長だ」、というものである。既存の研究に従って、彼は、「一人当たり GDP の伸びが、飢餓を失い、死亡率を低下させ、貧困削減に有効である」と考えている。再分配よりも経済成長のほうが有効なのである、と考えている。これについては、おおまかな点で一致できるのではないか。しかし、経済成長の方法について、彼は、これまで、「貧困と闘ってきた」人々が、どのような過ちなり誤解をしてきたのかを指摘する。

## 経済学者の誤解

(1) 援助で投資を増やせば経済は成長するという迷信。

資金ギャップモデルが予測する成長率と実際の成長率との間に相関はない。(高成長したはずのギニア・ビサウ、ジャマイカ、ザンビア、ガイアナ、コモロ、チャド、モーリタニは、独立時の投資も大きく、その後の援助も多かったが、高成長は達成しなかった。逆に、モデルでは、あまり成長しないはずのシンガポール、香港、タイ、マレーシア、インドネシアは、高成長を達成した)。

(2) 成長へのインセンティブが欠けているときは、どんなに機械を増やしても無駄。

生産者が機械を使用する環境に原因がある。機械は不要なものを生産することになるだろうし、機械はあっても、他の不可欠なインプットを入手できないこともある。富裕国には多くの資本があるが、それは技術進歩が収穫逡減を相殺するから生産に結びついている。

(3) 教育は普及したが、経済成長への効果としては期待外れ。

政府の政策が成長へのインセンティブを阻害している場合には、高度な技術が開発されても、関連投資を作り出すインセンティブを高めるどころか、相殺する以上のことになってしまう。成長へのインセンティブが欠けるために、機械や教育が増えても経済成長は起こらない。

(4) コンドームは、大量飢餓を避け貧しい国を豊かにする万能薬という誤解。

人口の増加は、利用可能な資源に対する競争を高める。つまり、技術面のイノベーションを促進する効果を持つ。経済発展こそが、人口抑制の最高の方法。両親の平均的な初期技能水準に応じて、高出生率・低所得社会になったり、低出生率・高所得社会になったりする。人口抑制をするためには、人的資本へ投資するインセンティブを高めるべき。

(5) 借金がインセンティブを削ぐ。

所得が上昇すれば、援助を減らしてきたので、豊かになることに対して、マイナスのインセンティブを与えてしまっている。経済成長政策が奏功して所得が上昇するにつれて、援助も増額するべき。構造調整融資の失敗は、債務の返済不能を容認してしまうこと。

(6) 債務救済をしても元を断たねば無駄

債務救済をしても、援助を悪用する能力にきわめて長けた途上国に援助を与えてしまうだけ。重債務の原因をつくった資金の乱費を続ける限り、本当に困っている貧しい人に援助は届かない。

債務救済プログラムが有効なのは、無責任な政府から政策が良好な政府へと確実に転換

し、その転換が不可逆なこと。

### 貧困の罟を抜け出すためには、どうすべきか？

それでは、「貧困への処方箋」として有効なのは、どのようなことなのだろうか。それは、インセンティブ（希望）を持って、「貧困の罟」から抜け出すことである。

#### （１）創造的破壊

人々に新しい技術を受け入れるインセンティブがあり、将来の利益のために、新技術を取り込む間は現在の消費を喜んで我慢しようするとき、経済成長が起きる。古い技術の信奉者は、成長過程が打ち負かされなければならない。彼らは旧技術でその競争力を守ろうとして、新しい企業が参入しないように障壁を築こうとするだろう。

#### （２）災害の対策

貧しい国は、豊かな国よりも自然災害に対して、脆弱。エイズの問題、自然災害、戦争、内戦などは、国の経済力を弱める。成長は初期条件に依存する。初期の貧困によって経済がある境界以下であれば、その国は離陸しない。成長は期待に依存する。良い期待が生まれるかどうか重要。

#### （３）政府が成長を殺す

政府は、成長にとって好ましくないインセンティブを生むような行動を慎むことによって、成長を殺さずに済む。高インフレ、為替レートの高い闇市場プレミアム、多額の財政赤字、大きくマイナスの実質利率、自由貿易に対する規制、過度の官僚的形式主義、不十分な公共サービス。

#### （４）汚職

国の制度の質も、汚職に影響を与える。

政府は、どの新興産業に補助金を出すかを決定するときに賄賂を取りがちなので、我々は、特定の新興産業に補助金を出すような産業政策を推奨しようとは思わない。

#### （５）分断と非効率な競争

複数の利益集団があるときには、政府の政策立案者にとって、インセンティブは歪んでしまう。

さて、このように考えてくると、成長へのインセンティブを阻害するのは、既得権であり、利益集団であり、そして悪しき政府であることがわかってくる。レントシーキングによる経済的非効率性の発生や社会的費用の発生が、成長を阻害しているのである。つまり、

Easterly は、まず、こうした構造問題を解決し、成長への正しいインセンティブを持つことが重要なのだと述べているのである。ここで、なぜ、Easterly が Public Choice のコンファレンスで講師を引き受け、アタッシュケースひとつで駆けつけたのか、という理由がわかる。貧困の解決問題に対し、公共選択論の知見が有効であるということなのではないか。

### 日本の「美しい国」への示唆

さて、Easterly の考え方は、貧困の問題や開発の問題だけに留まらない。日本の格差問題に対しても、有益な示唆を与えるだろう。

現在の格差問題への論調は、「市場主義」や「新自由主義」への批判が強いのであるが、これは間違いである。もちろん、現在は、構造改革の道半ばであり、移行期・過渡期ゆえの問題は発生している。しかし、だから「市場主義」の進展を止めるべきなのではなく、より一層、市場主義を進めるべきである。市場主義とは、まさに、インセンティブとインテグリティの世界である。インセンティブ（希望や要望）が出会い、競争をするということが、本来の市場なのではないか。だからこそ、市場主義は経済成長をもたらすのである。

再分配機能は重要である。しかし、既得権の保護につながるような格差是正は避けなければならない。市場主義の進展こそ、唯一の格差問題を縮小させるのである。

このように考えると、Easterly の示唆は、小泉内閣で進めてきた構造改革にもつながる部分がある。

若干、親離れしつつある「美しい国」を目指す安倍総理にも、ぜひ、この著書を、熟読していただきたい。

(やおいたしゅんぺい)

ウィリアム・イースタリー (2003), 『エコノミスト 南の貧困と闘う』, 東洋経済新報社  
(小浜裕久、織井啓介、富田陽子訳)

Easterly William, (2001), The Elusive Quest For Growth: Economist' Adventure and Misadventure in the Tropics, MIT Press